

柴田健志氏の発表についての

質疑応答

(質問者 1 名)

【質問】 松田克進（龍谷大学）

1) 発表者は「時間システム」という語で正確に何を意味しているのでしょうか。この語は、発表のタイトルにも、また本文の要所要所でも用いられていますが、明示的な意味規定がなされてはいないように思われます。

2) 発表者は、4頁の前半において、『エチカ』第2部定理4 5備考においてスピノザが（神のみならず）「個物もまた「永遠」である」と主張しているという解釈を示しています。しかし、スピノザは当該箇所（神のみならず）個物も永遠であると主張しているのでしょうか。確かにそこでスピノザは個物と永遠とを関係づけてはいますが、スピノザのポイントは、個物を妥当に理解することは個物を永遠なる神の様態として理解することを含む、ということにあり、個物そのものが永遠であるということにはないと思われます。いかがでしょうか。

3) 発表者は9頁後半で以下のように書いています。「《現在》から過去や未来へ超出するのではなく、むしろ《現在》に内在することによって、「持続」から「永遠」へと認識のAspectを変更することができるという考えが成立するはずである」。おそらく本発表の重要な論点（のひとつ）がここに提示されていると思われませんが、ここに含まれる以下の表現を噛み砕いた仕方で説明していただけないでしょうか。

- ① 《現在》から過去や未来へ超出する
- ② 《現在》に内在する

質問は以上です。

【回答】 柴田健志（鹿児島大学）

松田先生

ご質問ありがとうございます。大変参考になりました。以下、現時点でのご回答です。今後十分に再考し、書き直しに活かしてまいります。

(1) 「時間概念」とした方がよかったのかもしれませんが。ただ、打ち出したかった解釈は、「永遠」が実在的な時間であるのに対して、「持続」は人間的な表象にすぎないというものですので、「時間概念」では少し合わないと考えました。そこで「時間システム」にしたわけですが、確かにこの用語には説明が必要でした。ただたんに「時間」でよかったかもしれません。再考します。

(2) 確かに、定理45で証明されるべきことは個物の形相的なあり方ではなく表現的なあり方つまり観念ですね。ただ、同定理の注解で問題になっているのは「現実存在」であり、様態についても特に思惟属性における様態だけではなく、『エチカ』第一部定理16に言及して様態一般について語っているので問題ないと考えました。この点についてはもっと適したテキストを引用すべきかどうか検討いたします。

(3) 永遠だけが実在的な時間であるという解釈を前提し、過去・現在・未来という時間が構成されるには想像によって実在的な時間から外に出て、たんなる〈現在〉を過去と未来のあいだにおいて表象するという操作があるのではないかという考えを〈超出〉という概念で表現しました。これに対し、想像によらず知性ないし理性によって理解する限り、〈現在〉に対して外在的な過去・未来を媒介せずに〈現在〉を〈現在〉において端的に理解することができるのではないかという考えを〈内在〉という概念で表現しました。

以上です。

柴田健志